

ある “思弁”

—七二年、正月の読書から



周 郷 博

“思弁”ということばは聞きなれない、日々の人生となんのかかわりもない、無縁なものと思う人がさぞおおいでしょう。それを“詩”とか“哲学”とかいうことばで言いかえてもいいのですが、それがいまの日本には「無き過ぎる」のです。「知識」や「技術」や「社交術」ばかり過剰で、私は（私だけではない、と私は信じている）窒息しそうです。

私の敬愛する友、哲学者久野収は、日本脱出のことばを、こういうふうに語っていた。今この問題に関係のある部分だけを抜いてみる。日本が専門的知識という狭い——人間や全体とかかわりの切れた「ひとりよがりな」知識や技術

におぼれ込んで、そんな「専門化の時代にはいったとき、ヨーロッパは新たな哲学的思弁の時代にかわっていた。第二次大戦の経験から、哲学者のあり方が問われる一方で、学際的な学問によらなければ解けない問題が出てきたからです」その通りだ、と私のある部分を「買って来て」いる久野さんのことばを私はうなずくように納得した。「学際的interdisciplinary」つまり、「専門」というワクを取り払って、それを越えて安易、気短かな結論をいそぐのではなく、“思弁”の世界にはいり、それを「受けて立つ」心、覚悟が必須になってきているのです。

このような “精神的な” 点で、日本は経済大国かもしれ

んが、世界の孤児、アジアの孤児——孤児を自覚しない。ときに「かわい気を感じさせない孤児」のように思われる。中国のことを考えてみると、その距りに仰天せざるをえない。

こんなことをならべて、私はお母さんたちに無理難題を押しつけているのだろうか？ そうではない、と私は信じている。また、こんなことをいって、自分を高く見せよう、と思っているわけでもない。さらさら、ないのだ。わかってもらえるだろうか？（心配ノ）

「これを高くするものは低くされ、己れを低くするものは高くされるであろう」（マタイ、二三―一二）ということばは幼小なときから私の心の根にあって、今もある。罪、業のふかい人間ではあっても、このことについて私は人後に落ちないつもりだ。

私はこんな年齢になって、こんな「乱世」の時代に幼稚園長になった。なんと重荷か、と自分では思う。しかし「無事に」過ごせばいいなどとはどうしても思えない。「無事に」というのは私個人のことだけ、私の安全だけを考える、ということとしか思えない。私の無事が、日本の無事、安全なのかどうか。自分に向かって私はたえず問いかける。

年賀状に、園長先生の考えに協力したい、あるいは今年こそは先生と話したいという宿願をのべてきた者もいた。「よろしく」などという社交術だけではなく——ともかく私はお母さんたちに私の考えているところをわからせたい、可能だノと信じて書いているのだ。

内田義彦さんの「社会認識の歩み」の中の、マキャベリの「君主論」解釈のくだりにでてくる「フォルトゥナ（運命）とヴィルトゥ（徳）」という人生の二つの要因を扱った個所に、知識への接しかた、本の読みかたについて、こんな章句があった。子どもの見かた、成長（生成）発達の見かたとして「読みとって」ほしい、と私は思った。

「人間は、一方で運命に逃がれようもなくつきまとわれていきます。しかし同時に、これを統御することができる。いわば運命を素材とすれば、運命のことを知っていなければならぬ。第一、素材だって素直な木もあれば、どうしようもない木もある。が、どうしようもない、節だらけの木だからこそ使いものになるといったこともある。木を生かして使おうと思えば、木の言い分も聞かなければならぬ。相手を知らず、馬鹿の一つ覚えで主観を押し通すといったやり方をやっちゃ、木も死んじゃうが、こっちは死んじゃ

う。それにまた、運命の女神はなうての気分屋です。端倪すべからざる気質をもつ。その時々運命の姿態を見て、それに応ずる手が打てなければ、主体といったって、こっちが死体だ。それにつづいて「音楽の知識」よりも「音楽を聞くこと」音楽を聞く耳——「だれのなんという曲か知らんけれども、このところが私は好きだ」という形で聞くこと。それが手はじめです。」と内田さんが言ってる。その「運命」や「音楽」のようなものに向かう「徳」「聞く耳」を、私たちはどうやってもつことができるか。

藤堂明保氏の「中国」を読んだ。その中でてくる「天理人道」つまり「人間論」がいまの中国を生かし運かしているエネルギーの哲学（思弁・行動）だと藤堂さんは書いている。「力の論理」や「政治のかけひき」のことよりも、「何が人間らしい生き方か」という模索のほうがはるかに大事なことだと思う。私も、力量、器量は及ばずながら、教育学（哲学）を他人とは一風変わって「孤独にも」その線うのうで求めつつつけてきた。疲れた、と思うこともある。しかし「真理」が私を疲れさせず、生きかえらせてくれる。「真理」とはなにか？ 音、音ずれ……バッハの曲のような、ワーグナーの詩のような音、ことば……。

シモーヌ・ヴェイユの晩年、ロンドンから急行で一時間ほどのケント州アッシュフォードのサナトリウムで一九四三年の八月二十四日に餓死する直前のことば。

「あるコント。——ギザールというナイチンゲール（つぐみ科の候鳥）。その鳥はどこへ行けば声が聞けるか。それは私にはわからない。私の知ってることは、その歌が、人間がきいた歌の中で最も美しい歌だということだけです。——すばらしきこと。その名と、その完成さしか知らぬ一つの存在。それだけでそのものを見いだすのに十分なもの。それが神だ。」

私たちは、この能力、知恵を失っている!? 一九七〇年の九月初め、私はロンドンから汽車に乗って、快い苦勞のすえ、シモーヌ・ヴェイユの墓をたずねた。深い感動、よろこびが今も私の脈の中によみがえる。ともかく変わっている人間だ、と自分でも思う。お母さんたちよ、こんな私をわかってくれるか。

（お茶の水女子大学附属幼稚園PTA機関誌より）